

社会貢献を通して社会とつながる
econnect project (エコネクトプロジェクト)

北九州市立菅生中学校 小川 亮

生徒数	445名（特別支援学級20名）	教員数	36名
-----	-----------------	-----	-----

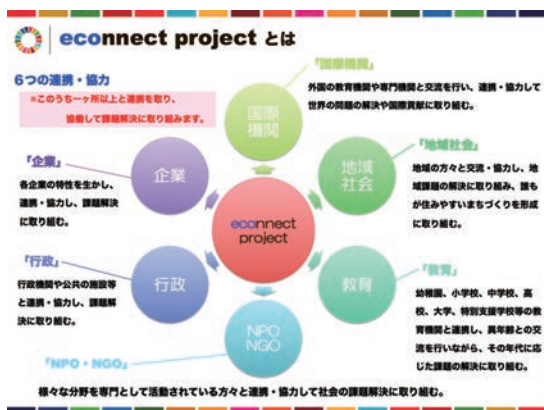
政令指定都市北九州市は、福岡県の北部に位置し、古くから城下町として発展したまちである。過去に産学官民が連携し、公害を克服した歴史をもち、現在では多くの環境施設や環境改善に向けた取組がおこなわれている。本校北九州市立菅生中学校には、情緒学級2学級、知的学級2学級の計4学級あり、20名の生徒が在籍している。



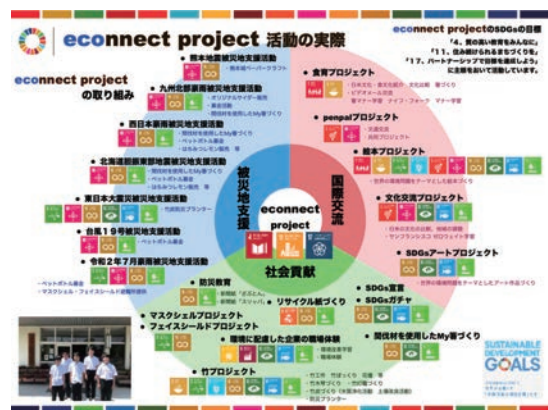
ループリックについて

これまでの本校特別支援学級の現状と取組

生徒一人ひとりが個の能力を最大限に発揮し、輝いた毎日を送るためには、「自己を知り、その能力を発揮すること」が必要になる。しかし、特別支援学級の生徒は、他者との比較、自己の特性や苦手さ、失敗経験の多さから他者への関りに対して消極的であることが多い。そこで、生徒の抱える課題を克服・改善し、「自立」と「社会参加」に向けた取組「econnect project(エコネクトプロジェクト)」を立ち上げ活動している。「econnect project」は、「eco(環境)」をテーマに様々な人と「connect(つながる)」していくプロジェクトである。「国際機関」「地域社会」「教育」「NPO・NGO」「行政」「企業」の6つの関係機関のうち必ず1カ所以上を連携・協働して活動している(図1)。「自立活動」「総合的な学習の時間」等の時間を核として活動し、「被災地支援」「社会貢献」「国際交流」の3つの分野でこれまで21のプロジェクトに取り組んできた(図2)。



(図1) econnect project 6つの連携機関



(図2) econnect project 21のプロジェクト

昨年度は、新型コロナウイルスの流行により活動の場が制限されたため原点に立ち戻り、「今、私たちに出来ること」として、「マスクプロジェクト」「フェイスシールドプロジェクト」「令和2年7月豪雨被災地支援活動」等に取り組んだ。

理想は「指導者」ではなく「ファシリテーター」

SDGsの目標を達成するためには、様々な課題を「他人ごと」ではなく「自分ごと」として捉え活動する事が重要であると考えている。昨年度までの活動より以下の点が課題となった。

- 活動範囲・活動回数の減少。
- 地域の課題の改善に自ら考え、取り組む力。
- 生徒自身が自身の活動を振り返り、改善・修正する力。

今年度は、昨年度の活動を継続しつつ、新たな活動にも取り組んだ。教師が課題を設定するのではなく、生徒自身が課題を設定し、生徒達が地域の課題を「自分ごと」として捉え、主体的に活動に取り組み、課題解決できるように目指している。そこで、新たに生徒自身が活動を振り返り改善・修正できるルーブリックの必要性を感じた。

新たな ESDルーブリックの作成にあたり、従来の SBL(Subject-based Learning) での活用はもちろんのこと、PBL(Project-based Learning) に対応し、SDGsの活動後には自己で振り返る事ができ、次の活動につなげる事ができるルーブリックを目指した。また、レーダーグラフを取り入れ可視化することで自己の特性について一目で把握できるようにした。

評価手法を適用した実践紹介

Step1 北九州市の課題より

これまで econnect project として多くの活動に取り組み、地域の課題を解決し、活動を重ね自己特性の課題や苦手さを改善・克服してきた。

北九州市は政令指定都市の中で高齢化率、人口減少率の割合が高い。本市には約 2,000haの農地があり、約 3000戸の農家が生活している。野菜、水稻、花き、果実、林産物、畜産物など、地域特性を生かした様々な農林畜産物の生産に取り組んでいるが、農業従事者の高齢化、農業後継者の不足、農家戸数の減少などの課題があり、農業生産力が衰退してきている。本校校区には多くの農地があり、今年度は地域の農家と連携し、地域の課題である農業支援について取り組んだ。

学習計画(2学期)

- ・農業について 2時間
(活動前ルーブリック実施)
- ・キャベツの苗植え 2時間
- ・肥料・雑草抜き 2時間
- ・収穫 2時間
- ・まとめ 2時間
(活動後ルーブリック実施)

※ルーブリックについては、活動前後で2回実施し生徒の変化を図った。



Step2 活動の開始

実際に農業支援プロジェクトを開始し、慣れないながらも作業に一生懸命取り組む生徒の姿が見られる中、生徒達から土壌の改善に本校校区の竹林整備から出た竹を活用した竹炭を活用してみたいという声が上がった。本市の竹林面積は 1,905haで市町村単位では全国有数の広さを誇り、竹林整備や竹の活用が課題となっている。そこで、その竹で作った竹炭を土壌に混ぜることで、土壌の改善、肥料コストの削減に取り組んだ。竹炭の作成には、地域の竹林整備に取り組んでいる方に協力していただき、作成した竹炭を畑に撒くことで土壌の改善を図った。

Step3 活動を振り返る

農家の方との交流が深まるにつれ、自分から質問したり、進んで地域の課題を解決しようとしたりするようになってきており、作物の収穫では、農業の大変さや楽しさを肌で感じることで、大きな喜びとなった。また、一つの課題を他の課題と繋ぎ合わせ共に解決するという SDGs の理念に沿って活動することができるようになり、地域の特性についても自ら学ぶ姿勢が身についてきたように感じる。

生徒の変容

(1) 「他人ごと」から「自分ごと」へ

活動当初、慣れない農作業に戸惑いながら活動に参加する生徒が多くいたが、活動を重ねる度に地域の農家の方との関係を深め、登下校時に自分から畑の様子を見に行くなど積極的に活動に参加できるようになっていった。また、活動当初は「地域に貢献したい」「地域の課題を解決する」という意気込みで取り組んでいた生徒たちも農家の人の苦労や悩みを共に体験を重ねることで農業の問題を「自分ごと」として捉え活動できるようになっていった。野菜嫌い生徒もいたが、自分で育てた野菜を食べ、「美味しい」「これからも野菜を食べようと思う」という感想も見られるようになった。

(2) ルーブリックの変容

特別支援教育では、個々の生徒の障害や特性に応じた指導・支援が必要となる。今まで本校特別支援学級で作成した独自のチェックシートを活用し、活動ごとに生徒の実態に応じた事前・事後学習に取り組んでいた。今回の農業支援プロジェクトでは作成したルーブリックを使用し、事前・事後学習に取り組んだ。

本校自閉症・情緒特別支援学級2年生を対象としたルーブリックの結果より

①本校入学時を振り返ったルーブリック(図3) ②活動前のルーブリック(図4) ③活動後のルーブリック(図5)

以上の3回、ルーブリックの測定を行った。

① 本校入学時を振り返ったルーブリック(図3)

入学時	学びに向かう力・人間性		知識・技能			思考力・判断力・表現力			備考
情緒学級 2年	自己肯定感	主体的に 取り組む態度	ESD の知識	探究の技能	経験知・ 活動行動歴	見方・考え方	未来を描いて 判断する力	表現力の活用	
A	5	5	6	5	6	5	5	5	
B	11	16	9	6	5	12	9	9	
C	11	12	7	11	6	16	14	11	
D	14	13	7	7	7	7	8	7	
E	6	5	6	12	7	5	5	6	
合計	9.4(47)	10.2(51)	7(35)	8.2(41)	6(30)	9(45)	8.2(41)	7.6(38)	

中学入学時を想定してルーブリックの測定を行った。個々の生徒の実態により結果にバラつきがあるものの、全体を通して測定結果が低い。また、「知識・技能」の測定結果が特に低い事が分かる。

② 活動前のルーブリック(図4)

活動前	学びに向かう力・人間性		知識・技能			思考力・判断力・表現力			備考
情緒学級 2年	自己肯定感	主体的に 取り組む態度	ESD の知識	探究の技能	経験知・ 活動行動歴	見方・考え方	未来を描いて 判断する力	表現力の活用	
A	15	18	14	16	20	16	9	15	
B	19	19	17	13	14	17	13	16	
C	13	13	13	12	9	16	14	14	
D	15	13	15	9	11	9	9	7	
E	14	11	15	15	15	12	11	13	
合計	15.2 (76) +5.8	14.8 (74) +4.6	14.8 (74) +7.8	13 (65) +4.8	13.8(69) +4.8	14(70) +5	11.2(56) +3	13 (65) +5.4	

入学時から始めた econnect projectの活動を通して数値が上がっている。SDGsの活動を通して、全項目で評価が向上している。特に「自己肯定感」「ESDの知識」「表現力の活用」の項目が大幅に向上していることが分かる。

③ 活動後のルーブリック(図5)

活動後	学びに向かう力・人間性		知識・技能			思考力・判断力・表現力			備考
情緒学級 2年	自己肯定感	主体的に 取り組む態度	ESDの知識	探究の技能	経験知・ 活動行動歴	見方・考え方	未来を描いて 判断する力	表現力の活用	
A	20 ₅	18 ₀	19 ₅	16 ₀	20 ₀	18 ₂	15 ₆	19 ₄	
B	20 ₁	20 ₁	20 ₃	13 ₀	17 ₃	20 ₃	16 ₃	18 ₂	
C	19 ₆	20 ₇	18 ₅	19 ₁₀	18 ₉	20 ₄	20 ₆	18 ₄	
D	15 ₀	16 ₃	18 ₃	16 ₇	10 ₁	12 ₃	11 ₂	10 ₃	
E	18 ₄	18 ₇	20 ₅	19 ₄	17 ₂	20 ₈	20 ₉	18 ₅	
合計	18.3(92) +3.2	18.4(92) +3.6	19(95) +4.2	16.6(83) +3.6	16.4(82) +2.6	18(90) +4	16.4(82) +3.2	16.6(83) +3.6	

今回の農業支援プロジェクト後の結果では、「未来を描いて判断する力」の項目で大幅に向上していた。これは、学校内の学習では分からない農家の方との交流や意見交換など「現場の声」や「他機関との連携」が大きく影響し、「地域の課題を解決し、未来へつなげる」という取組からも数値に現れていると考える。「探究の技能」の項目では、向上しているものの大きな変化がなかった。今回の農業支援プロジェクトでは、プレゼンやICT、外国語の活用が少なく、今後の課題となった。

実践を通しての考察、発見、感想

今回のルーブリックを使用した感想として、活動ごとに生徒の変化を可視化し、自己分析できる事が一番大きな特徴であるとする。生徒達が卒業後も主体的に社会参加し、活動を継続していくには、自己調整力が必要となる。今回のルーブリックのように生徒自身が自分で活動を振り返ることができれば、将来にわたって「主体的に」「継続的に」社会参加し、活躍できると考える。また、実際に今回のルーブリックを使用して、教師の今後の活動の指針としても活用できると考えている。活動後のルーブリックの結果のように「探究の技能」での結果が低い場合には、ICTを活用し全国の農業の情報の収集や分析、プレゼンの機会を設けるなど修正・改善をすることができる。今回のルーブリックは基準となるもので、完成ではない。使用する教師が対象となる生徒の特性や学校の特長に応じて独自のアレンジを加え、活用することで理想とするルーブリックとなり、より良いものになると考えている。今回のルーブリックが多くの生徒、教師の羅針盤となってくれたら嬉しい。

評価手法開発にあたり参考にした文献・書籍・教材

- ・ 日本ユネスコ国内委員会(2016)「ESD推進の手引き(初版)」
- ・ UNESCO(2012) Shaping the education of tomorrow : 2012 full length report on the UN Decade of Education for Sustainable Development. UNESCO,Paris.
- ・ UNESCO(2017) Education for Sustainable Development Goals: learning objectives. UNESCO,Paris.
- ・ ACCU(2020)「変容につながる16のアプローチ -SDGsを活かした学校教員の取組 -」
- ・ ACCU(2021)「変容を捉え、変容につながる評価のカタチ -SDGs時代を生きる学校教員の知恵 -」

問い合わせ先

学校名
氏名
電話番号
住所
メールアドレス

北九州市立菅生中学校
小川 亮
093-451-1005
〒803-0279 福岡県北九州市小倉南区徳吉南二丁目2-1
Sugao-j@kita9.ed.jp